

# カサノバ

2006(平成18)年4月5日鑑賞(ヘラルド試写室)

★★★★



監督＝ラッセ・ハルstrom／出演＝ヒース・レジャー／シエナ・ミラー／ジェレミー・アイアンズ／オリヴァー・プラット／レナ・オリン／オミッド・ジャリリ／チャーリー・コックス／ナタリー・ドーマー／ティム・マッキナリー（プエナ ビスタ インターナショナル（ジャパン） 配給／2005年アメリカ映画／112分）

……いや、知らなかったなあ。こんな有名な実在のプレイボーイが18世紀のベネチアにいたなんて……。ハンサムで知的かつ女性を喜ばせるベッドテクニックも堪能、といってもそのプレイボーイぶりを自慢しただけでは、面白いストーリー構成はムリ。そこで登場させたのが、斬新な女性解放論を展開する美しい娘。プレイボーイを目指すあなたなら、東西文明の結節点となる自由都市ベネチアでの、華やかな仮面カーニバルをハイライトとして展開されるドタバタ劇を楽しむとともに、恋愛のマル秘テクニックをしっかりと学びたいものだが……？

## カサノバは実在の人物！

この映画の主人公、ジャコモ・カサノバ（ヒース・レジャー）は1725年ベネチアで役者の子として生まれ、1798年に死亡するまで、ヨーロッパ中で波瀾万丈の人生を送った有名な人物であることを、私はこの映画を観て、そしてパンフレットを読んで初めて知った。

パンフレットによれば、彼の肩書きは山ほどあるが、最も輝かしい称号は「人類史上最高の『恋愛の達人』」とのこと。

また、彼がフランス語で綴った『回想録』には、その数130人といわれる、愛し愛された女性たちとの愛と冒険の日々が描かれているらしい。何ともうらやましい限りだが……。

## カサノバの魅力は？

カサノバの自由奔放な生き方は、スタンダールやバルザックなど多くのヨーロッパの作家たちが刺激を受けているそうだし、映画でもフェデリコ・フェリーニ監督の『カサノバ』(76年)、アラン・ドロンがカサノバの晩年を演じた『カサノヴァの最後の恋』(92年)などで、稀代のプレイボーイであるカサノバの姿が描かれているらしい。

さらにパンフレットには、『色事師カサノヴァの青春』などの著者である清水正晴氏の「ジャコモ・カサノバの魅力」と題する解説があるから、カサノバは日本でもかなり有名な人物……？ それによると、①ベッドでの女性の期待を裏切らない魅力を含めた、美しく強靱な肉体的魅力、②たぐいまれな知性と豊かな感性という2つの魅力を持ったカサノバだが、結局「カサノバが女性に接するときは、真情にあふれ、優しさにみちて、ひたすらにつくし、決して裏切ることはなかった。『回想録』は純情そのものの男の愛の遍歴の記録である」と絶賛している。しかし、これってひょっとしてカサノバへのオベンチャラ、それともホントの本心……？

## カサノバに対抗できるような「日本男児」は？

日本はヨーロッパにおける「ルネッサンス」を経験していない。また、特に徳川時代以降は、「性」に対して抑制的・禁欲的な社会となった(?)ため、カサノバのようなプレイボーイは日本には生まれていない……？ もっとも、井原西鶴の『好色一代男』などには、その時代なりのプレイボーイが登場しているのかもしれないが、残念ながら私はあまりよく知らない……。

そこで、カサノバに対抗できるような「日本男児」はホントにいないのだろうかとかよく考えてみると、そんなことはない。ハンサムかつ知的、そしてベッドテクニックもすばらしい色男という意味では、時代は少しさかのぼるが、日本の最高のプレイボーイは『源氏物語』の主人公である光源氏！ もっとも、カサノバは「2メートル近い長身で、ヘラクレスの肩とローマ剣闘士の筋肉、それにジプシーの青年のような浅黒い肌を持っていた」というから、その点だけは劣るが、

日本サイズ (?) としては十分……?

## 18世紀のベネチアの魅力

こんな「快樂の放任主義」と称された稀代のプレイボーイが生まれ、130人の女性遍歴を描いた『回想録』まで残されることになったのは、彼が生きた18世紀のベネチア共和国が、東西交易の結節点としての魅力に溢れた都市であったうえ、経済的にも栄え、自由を謳歌できる時代状況にあったことが大きな原因。もちろんまだ中世の延長の時代だから、女性たちもその後の近代市民社会における「自由恋愛」を謳歌するにはほど遠い状況で、宗教的制約をはじめ、さまざまな制約下にあったはず。

しかしそれでも、有名なベネチアの仮面カーニバルでは、仮面をつけることによって、社会的な立場や職業、身分の上下をごまかすことが容認されたため、男女がその本性に戻って自由にアバンチュールを楽しんだらしい。この映画の中には、そんなベネチアの雰囲気がいっぱい……。

## フランチェスカの進歩性とカサノバ

この映画ではもちろんカサノバが主人公だが、その華やかなプレイボーイ性だけに目を向けるのではなく、プレイボーイのカサノバが生涯でただ一人、その対応にとまどい、真剣に向かい合うことになった女性、フランチェスカ（シエナ・ミラー）を登場させたのがミソ。

①フランチェスカが大学の講堂の討論会で主張する女性の解放論、②フランチェスカがゲアルディというペンネームで出版している、教会から見れば反社会的な小説、③フランチェスカがカサノバに宣言した、「私は生涯、ただ一人の男性だけを愛する」という恋愛論。これらは、カサノバにとってはビックリするもので、自分が持っている (?) 女性観やその実践とは完全に矛盾し、その対極にあるもの……。

したがって、カサノバはそんなフランチェスカの女性論など見向きもせず、無視してわが道を……と思ったが、そうならないところが、この映画のミソ。つまり、そういう進歩的で解放的な女性フランチェスカを登場させるというアイデア

が思い浮かんだためにこの映画が企画されたということだから、この映画では、このフランチェスカがキーウーマン……。

そんな重要な役柄を演ずるシエナ・ミラーは、はじめてメジャー作品の重要な役で起用された『アルフィー』（04年）で主演の美男子ジュード・ロウと婚約しながら、すぐにその婚約を解消してしまったという、フランチェスカの主張とは相反する生き方をしている（？）1981年生まれの若手女優……。そんな彼女の演技を、フランチェスカの主張と合わせてじっくりと鑑賞したいものだ。

### やっぱり犯罪だから、誤解なきよう……

「プレイボーイ」というか「女たらし」というか「色事師」というか、その他どんな表現をするかは別として、カサノバがやっているフリーセックス行為自体は、近代刑法においては強姦罪にならないことはもちろん、何の犯罪にもならないもの。しかし、日本国ですら明治刑法には「姦通罪」があったのだから、18世紀のベネチア共和国でも、いくら自由を謳歌していたとはいえ、それと同じように不貞行為を処罰する刑法や宗教上の制裁があったはず……。

映画の冒頭、修道院の中で修道女と情交を重ねるカサノバの姿が描かれるが、この未婚の修道女との性行為だって当然、何らかの犯罪に該当しているはず……。結果として、映画の中ではカサノバは、不貞、放蕩、異端行為、不法家宅侵入etc……で「死罪」を宣告されるが、これはある意味当然。「快樂の放任主義」などと世の女性から称賛を浴びていても、やはり彼のやっていることは当時としては犯罪だから、誤解なきよう……。

### グアルディから連想する「マルキ・ド・サド」

この映画で、フランチェスカがグアルディのペンネームで出版していた小説が、どの程度反社会的で、世間を騒がす異端小説だったのかは、映画の中では全く明らかにならない。しかし、ローマからベネチアに送り込まれてきた厳格なプッチ司教（ジェレミー・アイアンズ）が、カサノバとともにこのグアルディを「2人の危険人物」として、その逮捕に執念を燃やしたのだから、その小説の反社会性はかなりのモノ……？

そこで私が連想したのは、あのマルキ・ド・サド。サドはカサノバの少し後輩（1740～1814年）で、フランス革命後、反社会的と烙印を押された小説を書き続けたことによって、ナポレオンらからひどい弾圧を受けた人物（『シネマルーム1』74頁参照）。したがって、フランチェスカことグアルディは、このサドとそっくり……？

もっとも、いくらフランチェスカが進歩的な女性観を持っていたとしても、あのサドほどの「反社会的」な小説が書けたとは到底思えないが……？

### 「お助けマン」 総督のアイデアは……？

死罪の宣告をされたカサノバを救ったのは、ベネチア総督（ティム・マッキナリー）。なぜ総督がカサノバを擁護するのかも、この映画ではよくわからない。しかしその後もずっと、カサノバの擁護者の立場を貫いている彼の姿勢を見ると、それは、ベネチア共和国の総督としてローマ教皇庁の圧力に屈したくないという反骨精神と考えられる。そしてそう思うと、総督の姿がえらく立派に思えてくる……？

今回の死罪は、総督の取りなしによって何とか無罪放免にできたものの、それ以上の擁護は難しいと考えた総督は、カサノバのために、カサノバをベネチアから追放するという案を出し、それがイヤなら、きたる仮面カーニバルの日までに、良家の子女と結婚しろと命じたが、このアイデアもなかなかのもの……。

### ベネチアには「いい女」がウジャウジャ……

稀代のプレイボーイであるカサノバが、どこまで本気で年貢の納め時と考え、結婚しようと決意したのかはわからないが、映画のストーリーを観ている限り、カサノバは真剣に花嫁候補を探した様子。

すると、いるわいるわ、さすが東西交易の接点ベネチアには、「いい女」がウジャウジャ……。

そんなよりどりみどり状態の中で、カサノバが従者のルポ・サルヴァット（オミッド・ジャリリ）と相談しつつ選んだのは、ベネチア1の美少女で、処女の誉れも高い名家の1人娘ヴィクトリア・ドナート（ナタリー・ドーマー）。あの時代

の男女の結婚は、本人だけの自由意思でできるものではなく、いろいろとややこしい手続が必要。

ところが、カサノバが求婚に赴いたところ、父親の反対にあったものの、当のヴィクトリア本人がカサノバとの結婚を強く希望したため、見事に婚約が成立。これでめでたし、めでたしとなるはずだったが……。

### イチャモンをつけたのは……？

いつの時代でも、「ひきこもり型」のヘンな若者(?)がいるもの。ベネチア1の美少女の姿をいつも窓から見つめていたのは、フランチェスカの弟のジョバンニ・ブルーニ(チャーリー・コックス)。ところが、このジョバンニの見てる前で、突然ヴィクトリアとカサノバの婚約が成立したため、これに驚愕したジョバンニはカサノバに決闘を申し込むという勇ましいことに……。

当初これを軽くかわしていたカサノバだったが、従者のルボが受けてしまったため、やむなく決闘の場に……。剣に自信を持つカサノバは軽くないはずもりだったが、意外にも相手の剣さばきは手ごわいもの。しかし激しい応酬の末にやっと相手の仮面をはぐと、それはジョバンニではなく、その姉のフランチェスカだった……。

### 2人のめぐり会いから生まれたものは……？

そんなめぐり会い(?)の中で、カサノバとフランチェスカの女性観をめぐる大論争が……。当初はフランチェスカの主張に面食らったカサノバだったが、そこは歴戦の勇士(?)、その対応策を着々と……。

さらに、ジョバンニからカサノバにもたらされた情報は、フランチェスカは夜遅くまで書き物をしているうえ、昼間は内緒で外に出かけているから、きっと姉には秘密の恋人がいるらしい、ということ。やはり女はナゾが多い方が魅力を増すもの……？

こんなジョバンニの話に興味を持ったカサノバが、フランチェスカの後をつけていくと、彼女がたどり着いたのは作家グアルディの家。さて、フランチェスカはここで一体何をしているのだろうか……？

## フランチェスカの婚約者は？

それまで女から迫られるばかりで、1度も真剣に真正面から女性と向き合ったことのないカサノバだった(?)が、なぜかフランチェスカだけは別。ひょっとしてこれって、カサノバがフランチェスカに恋をしたということ……？

そんな不思議なはじめての気持ちに悩むカサノバに対して、もたらされた新たな情報は、フランチェスカが明日、親の決めた婚約者、ピエトロ・パプリッツィオ(オリヴァー・プラット)と初の対面を果たすということ。そこで、カサノバが考えた「恋の計略」は……？ さらに、カサノバのフランチェスカに対する働きかけは……？

## 名前と顔が錯綜して、話が……？

こちらあたりから突然、話をごちゃごちゃになってくる。それは、カサノバはもちろん、グアルディもパプリッツィオも、ホンモノが誰でニセモノが誰なのかが、ストーリー展開上きわめて複雑になってくるため……。

まずカサノバは、自分がカサノバだということを、ジョバンニにもフランチェスカにも説明していないばかりか、フランチェスカに対しては、何と自分こそが婚約者のパプリッツィオだと名乗ったから、以降話がややこしいことに……。

他方、フランチェスカも、自分がグアルディであることは秘密にしたままだったが、プッチ司教らはいろいろと調べた結果、カサノバ＝グアルディだと判定したから、またややこしいことに……。

さらに、カサノバが接触したパプリッツィオも、太っている点は同じだが、どうも人違いだったようで、後に登場する馬鹿デカイ体格をしたホンモノのパプリッツィオは、ラード(脂)で財を成したジェノヴァの大商人……。その他さまざまの人間が入り乱れたストーリーは、華やかな仮面カーニバルで最高潮に……。これ以上ここに書くのもややこしいので、あとは映画を観てのお楽しみに……。

## 口説きの舞台は気球の中……？

『八十日間世界一周』(56年)は、気球に乗って世界を1周する冒険物語だった

が、科学文明の進んだ18世紀のベネチアでは、既にこの時期に気球が実用品として登場していたらしい。そして、この気球こそ、カサノバがフランチェスカを口説くのに用意した最高の舞台……。

それまで何となく、婚約者のパプリッツィオだと名乗る男に対して乗り気でなかった(?)フランチェスカだったが、この最高の舞台での口説きにはイチコロ……。となりかけたが、気球の目の前に見えた大看板に描かれているパプリッツィオの姿と、目の前にいるパプリッツィオの姿は大違い……。

「あなたは一体ダレ……？」と追及される中、ついにカサノバは自分がカサノバだと告白したが……。

### こんな、あり……？

空に舞い上がる気球の中に、フランチェスカが男と一緒に幸せそうに並んでいる姿を見て、ショックを受けたのが、ホンモノのフランチェスカの婚約者であるパプリッツィオだった。しかし、マザコン気味(?)のパプリッツィオは、その直前にめぐり会ったフランチェスカの母親アンドレア・ブルーニ(レナ・オリン)の魅力に既にゾッコン……？

他方、母親にしても、まだまだ自分の女としての魅力は捨てたものではないと自信を持っていたため、フランチェスカが気球の中の男と一緒になるのなら、パプリッツィオはもはやフリーの身だと説明したところ、何とこの2人は互いに手を握り合う仲に……。ホントにこんなあり……？

### 少し物足りない法廷シーン……

グウィネス・パルトロウがヒゲをつけて男装し、シェイクスピア劇を演じたのが、『恋におちたシェイクスピア』(98年)。これに対して同じくリン・コリンズがヒゲをつけて男装し、刑事事件の弁護士として登場したのが『ヴェニス商人』(04年)。この『ヴェニス商人』では、男装の麗人の弁護士がきわめて重要な役割を演ずるが、この映画でも、その法廷シーンを彷彿させるようなシーンが少しだけ……。

それはカサノバが、カサノバとしての他、グアルディとしても処罰されようと



していたところに、フランチェスカ演ずる弁護人が、カサノバはグアルディではないと弁護するシーン。しかし、どうもこの弁護術は、『ヴェニス商人』における弁護術に比べると未熟だったようで、自分がグアルディだと自白することによって、カサノバを助けることができただけ……。

その結果、カサノバもグアルディことフランチェスカもともに死刑宣告という最悪の結果に……。丁々発止の法廷シーンを期待していた私としては、これは少し物足りないもので、もう少し工夫がほしかったと思うのだが……。

もちろんこれが、フランチェスカのカサノバに対する献身的で自己犠牲的な愛情の発露であることはわかるものの、こんな結果に終わったのでは、浅はかで悲しい女の浅知恵のレベルで終わってしまうのでは……？

### マンガ的な部分がマイナスポイント……？

この映画は、カサノバをフランチェスカと「対決」させることによって、カサノバという稀代のプレイボーイの生き方を描いた面白いもの。さらに、ベネチア共和国のあり方やローマ教皇庁のナマの姿もよく理解できるため、さまざまな教材としても十分役に立つもの。

ところが他方、グアルディと誤解されたり、パプリッツィオと誤解される子ブタのような男の登場や、パプリッツィオとフランチェスカの母親との恋愛模様など、ヘンなギャグ(?)を使ったマンガ的な部分が目についてしまう。

これでは、せっかく18世紀の華やかなベネチアを舞台とし、そのハイライトシーンとして仮面カーニバルを設定したにもかかわらず、その華麗な流れに水をさしてしまうことに……。私の採点では、このマンガ的な部分がかなりのマイナスポイント……。

2006(平成18)年4月6日記